

異世界で、もふもふライフ始めました。

黒兎

黒い兎族の男性。
ミキに興味があるようで、
彼女の周辺で怪しい動きを
している。

モネット

美しい猫族の令嬢。
ジョルトを夫にと
狙っている。

ジョルト

なげひい
傭兵を生業としている、白虎の獣人。
強い希少種のため、よく女性から
結婚相手に望まれるが、本人は
うんざりしている。だが、ミキとの旅の途中、
とあるハプニングによって
彼女を嫁にすることに……!?

ミキ かのうみき
(加納美紀)

失恋キャンプ中、突然異世界に
トリップしてしまった、25歳。
華やかな見た目から周囲に誤解され
やすいが、中身はいたって地味。
マッサージが得意。

ハンナ

兎族の獣人で、力のある呪術師。
人懐っこい性格で、
ミキともすぐ友達になる。

アニエス

服飾店を営む、豹族の女性。
サバサバしている、
ミキの頼れる友人。

白虎

ジョルトの獣体。

目次

第一章	気を付けよう、キャンプ中の川の増水	7
第二章	人間、安易にモフると後悔するものだ	53
第三章	獣人の街はケモ耳天国	99
第四章	トラブルは避けても寄って来る	131
第五章	マッサージは奇跡の業 <small>わざ</small>	189
第六章	珍獣にコレクターはつきものらしい	229
終章		278

第一章 気を付けよう、キャンプ中の川の増水

夜、とあるアパートの一室にて。

「……馬鹿だ、ほんつとうに反省しない馬鹿だ、私って。こうなるって分かっていたじゃないの」
大泣きしながらぶつくさ文句を言っている女の名前は、加納美紀^{かのうみき}。大手商社に勤めるOLだが、それも今日までの話。

今朝、出社してすぐに退職願いを出し、ついに残った有給休暇もブン捕った後、会社を飛び出したのだ。

何故美紀が退職することにしたのか——それはつい一週間前まで付き合い合っていた男が原因だった。彼は同期入社 of 営業マンで、営業事務をしていた美紀とは共に仕事をする関係だった。やがて二人の仲は、プライベートで親密な付き合いをするまでに発展。恋人として三年付き合い、そろそろ結婚も視野に入れていたのだが——

『俺、美紀と別れてこの娘と付き合うことにしたから』

彼に突然こう宣告され、紹介されたのは美紀が指導していた後輩だった。

『ごめんなさい、先輩。いけないことだと分かっていたんですけど、先輩のことで相談に乗ってい

るうちに……』

後輩は彼の背中に隠れてフルフルと震えながら、しかし目元はニンマリと笑っていた。そんな後輩の様子に気付かない彼は、力強く彼女を抱きしめる。

『お前は悪くない。ただ俺が、美紀のことを信用できなくなったただけだ』

『違うの、好きになった私が悪いの』

『いいや、何度でも言う。お前は悪くない』

目の前で二人の世界を繰り広げられ、美紀は次第に怒りを突き抜けて虚しくなる。

『もう勝手にすれば？』

抱き合う二人にそれだけ言い残し、その場を去った。

美紀の破局のニュースは、その日のうちに社内を駆け巡った。社内はどこへ顔を出しても、興味本位の噂話に晒される。噂の内容は、美紀が恋人と上手くいっていない八つ当たりで、後輩を苛めていたというものだった。

噂の出所はあの後輩だ。あるうことか、彼女は以前から美紀を嫌っていた女子社員達にその話を持って行った。そして、格好のネタを掴んだ女子社員達は、『酷い女である美紀に正義の鉄拳を』という名目で嫌がらせを開始する。

資料を隠したり、頼んだ仕事を聞いていないと突っぱねたりと、美紀の業務に支障の出る陰險な嫌がらせばかりだった。それでも仕事は仕事だと必死にこなしている美紀の横を、後輩と元恋人が腕を組んで楽しそうに帰って行く。

そんなことを続けて一週間、謂れない仕事の妨害行為にとうとう我慢ができなくなり、美紀は退職願いを出したのだった。

上司は『引き継ぎはどうするんだ!?』と怒鳴っていたが、それに関しても抜かりはない。いつ堪忍袋の緒が切れてもいいように、完璧な引き継ぎ書類を作成してある。仮に足りない部分があっても、きつと後任となる後輩に、親切な男性社員が手取り足取りの付きっ切りで教えてくれるだろう。他人には『恋愛問題』ごときで仕事を辞めるなんて!』と言われたが、ならばあの状況をアンタが味わってみると言いたい。美紀はあんな針の筵に座るような思いをしてまで、続けたくはなかった。元々、今の仕事は向いていないかもしれないと悩んでいたのも、これを機に辞めることに躊躇いがない。

こうして会社を辞めた美紀はコンビニで酒とツマミを購入して自宅アパートに帰り、一人でヤケ酒を飲んでいる。

『あー、また失恋、しかも略奪されての失恋。懲りないなあ、私って』

全てを捨てて一人になると、またフラれた怒りと悲しみが込み上げてくる。

泣きすぎて腫れぼったくなっている目元を乱暴に拭き、魂まで抜けてしまうかのような深いため息を吐く。

先ほどまでの美紀はシクシクなんて可愛いものじゃなく、ダバダバという勢いで涙を流していた。思い返せば、恋人を盗られるのはこれが初めてではない。中学の頃からいつも、恋人ができては誰かに奪われることの繰り返しだった。

気持ち離れる理由だっていつも一緒。

『君は俺が思っていたのと違っていて、なにを考えているのか分からなくなった』
そう言われる原因は、恐らく美紀の見た目と内面のギャップだ。

美紀は自分で言うのもなんだが、目鼻立ちが華やかな美人顔で、スタイルもモデル並みに良い。色々な男性に告白されていたせいで、恋愛面でも派手なのだろうと思われ、『男を侍らすハーレム女』とまで噂されていた。

だが、美紀の内面はとても地味だ。休日是一个人で家に籠って本を読んだりネットを見たりするのが好き。服だって仕事着とパジャマがあればよくて、あまりお洒落に気を使うのは好きじゃない。

この内面が見た目に合わないと感じたのは、中学生の時。この頃にはすでに容姿で目立っていた美紀は、集団の中心にすることが多かった。『なんでもデキる女』だと思われ、教師やクラスメイトからリーダーシップを発揮することを期待される。

美紀は周りの期待に応えようと、見た目に合った振る舞いをした。

だがそれは所詮嘘の自分。

級長に推薦されても上手く立ち回れず、お洒落な女子達のグループに誘われても溶け込めない。

『加納は思っていたのと違うな』

すぐに周りからそう言われるようになった。

それが苦痛で、また嘘の自分を演じ始める。今までその繰り返しだった。

たった一人だけでもいいから本当の自分を分かってくれる人が欲しいと、恋人を作ったりもした。

しかし彼らも最後に周りと同じことを言い、見た目と中身が一致する（ように見える）女子に奪われるのだ。

仕事のことだってそう。美紀は本当は、マッサージ師になりたかった。

学生時代にマッサージにハマり、色々な関連本を買い漁って試したり、有名なマッサージ師の講習会に参加したりした。

本気でマッサージ師になりたいと思った美紀が両親にそれを告げると、彼らは冗談を言うなど一笑に付した。

『それは大学を出てまでする仕事ではないだろう』

あの頃の両親は周囲同様に、美紀は人の先頭に立つタイプだと思っていたらしい。そして仕事もリーダーシップを発揮するものを望んでいた。

『マッサージ師を目指すというのなら、学費や仕送り代を全て返せ』と理不尽なことを父に言われ、大喧嘩をしたのだ。

それ以来家に帰らず、アルバイトとしてマッサージ店に勤めた美紀だったが、すぐに夢を追う難しさを知ることになった。

正式にマッサージ師になるには、資格を取るための学校に行く必要がある。しかし、お金を稼ぎながら学校で勉強するのは体力的にも金銭的にも厳しく、挫折する者も多い。

結局、美紀も夢を追うことを諦め、大学卒業後は無難な会社勤めにおさまってしまった。

このように、美紀は外見のイメージと本来の自分とのギャップに悩んでばかりの人生だった。

今回も、『この人なら……』と思つて付き合つたが、結果はご覧の通りである。

「でももう、今度こそこんな恋をやめる！ 自分に嘘をつかないわ！」

美紀はそう決意して、泣くのをやめた。そして失恋後の恒例行事——気分転換のキャンプに行くため、リュックに荷物を詰めていく。

この失恋キャンプは、大学時代に雑誌の特集に影響されて始めた。一人だと家に籠こもりがちな美紀は、自然の中で気持ち洗われるような体験をし、それ以来癖になつたのだ。

今時のキャンプ場は、テントからバーベキューまで準備万端に整えてくれるという親切仕様になつている。また、今回行くのはこれまでに何度も行ったことのある慣れた場所であり、危険だなんて考えもしなかつた。

この認識が、間違いの始まりだとも知らずに。

翌朝、リュックを背負つた美紀は電車に乗つた。最寄り駅からの送迎バスに乗ればキャンプ場はすぐだ。

昨日のうちに予約を入れていたので、すんなりとテントへ入ることができた。最近立派なテントにベッドが用意されているプランもあるが、美紀は昔ながらのテントで寝袋を使うスタイルが気に入っている。

先日までずっと続いていた雨が嘘のような晴天になり、美紀の心も晴れ渡るようだ。

「やっぱり、来てよかつた」

キャンプ場が用意してくれた昼食を食べた美紀は、近くを散策しようと思ひ立つ。ちよつとの時間なので、荷物を置いて身軽な状態で出かけることにした。

「雨で川が増水しますので、近付かないでくださいね」

そんな係員の注意に軽く頷き、遊歩道へ向かつた。

キャンプ場近くの遊歩道は綺麗に整備されているが、奥に行くと自然のままになっている。美紀は奥の方が自然を感じられて好きだ。

遊歩道に沿つて川が流れているのだが、進むにつれて水音がはげしくなってくる。木々の隙間から見える川の流れが荒々しい。

この時ちよつとした好奇心が湧いて、美紀は川岸に近付いてみることにした。所々『危険！』という札が下がつたロープが張られているが、少し川の流れを見たらすぐに戻るから危ないことなんてない——そんな軽い気持ちで。

「うわあ、すごい水の流れ」

ドドド、と音を立てて流れる水に、美紀は感心する。

その時——

ドオオン！

川上の方で音がした。

——なに……？

音の原因を探ろうと川上を仰ぐと、こちらへ押し寄せる鉄砲水てつぱうみずが見える。

「……っ!!」

美紀は悲鳴すら上げられず鉄砲水てつぽみずに流され、そのまま意識を失った。

美紀がうつすらと目を開くと、木目調の天井が視界に入った。

——私、どうしたんだっけ……。確かキャンプに行って、散策して、鉄砲水てつぽみずにあつて……

「そうか、流されたんだ」

今こうしているということは、どうやら鉄砲水てつぽみずに巻き込まれつつも命は助かったらしい。

首を動かして周りを見ると、自分がいるのは木目調の壁に囲まれた部屋だった。家具は寝かせられているダブルサイズのベッド以外にはなく、簡素な印象を受ける。ここはキャンプ場の施設の一つだろうか。

現状の確認ができると、美紀の口から自然とため息がもれた。

——馬鹿だなあ、私。

係員に注意されたし、『危険!』という札もあつたのに、スルーして興味本位に動いた結果がこれだ。

何度か一人でキャンプをして、山を知った気でしたのかもしれない。こんな軽はずみどころが、『思っていたのと違う』と言われる要因の一つだ。

とりあえずベッドから身を起こそうとすると、身体のうちらこちらが痛む。流される時、恐らく岩に当たつたのだろう。それでもなんとか起き上がると、何故か上半身は裸で、かろうじてパンツ

だけ穿はいていた。

——え、なんで裸?

助けてくれた人が脱がしたのか。もしかしたら、流されている間に服が駄目になってしまったのかもしれないと思った、その時。

ガタン!

タイミング良くドアが開く。慌てて布団を手繰り寄せてそちらを見た美紀だったが——
「グルルル!」

現れたのは、黄色い毛に黒の縞模様しまの大型猫科動物。

そう、虎だった。

——なんで虎が!?

驚きのあまり悲鳴すら出ない。そうしている間に虎はのっしのっしと歩いて来て、ベッドに前足を載せた。

「……つきやー!!」

美紀は今度こそ、けたたましい悲鳴を上げた。

「グウツ!」

その声に驚いたのか、虎が慌ててドアから逃げていく。

——警察に通報しなきゃ……! でも、スマホは置いてきたし……!

パニックになるあまり美紀が心臓をバクバクさせていると、再びドアが開く。今度現れたのは

三十代後半くらいの背の高い女性だった。浅黒い肌金の癖毛を背中まで流し、緑の瞳をしている。服装はカラフルな布を胸から巻きつけるような格好で、どこかの民族衣装っぽい。

美紀は彼女に虎がいたことを訴えようとして、固まる。

——キャンプ場に、外国人？

一瞬そう思ったが、どう見てもキャンプをする格好ではない。そしてキャンプ場に虎はいないはず。本当にここはキャンプ場なのか、そうでないとしたら今自分はどこにいるのかと、とてつもない不安に襲われた。

「あの、こっつてキャンプ場ですよね？」

恐る恐る尋ねる美紀に、彼女は困った顔をした。

「※※※※？」

「……え？」

彼女が何事か尋ねてきたが、話す言葉が分からない。

「※※※※？」

続けて質問されたようだが、やはり理解できない。今まで一度も聞いたことがない言語だった。

どういうことかと眉をひそめた次の瞬間、美紀の視界を奇妙なものが横切った。それは黄色地に黒の縞模様が入った細長い棒状の物体で、先ほど部屋に入ってきた女性の腰のあたりでユラユラと揺れている。

——虎の、尻尾？

驚き固まる美紀を、彼女がしゃがんで心配そうに覗き込む。すると、今度は彼女の頭の上に丸く黄色い毛並みの耳を見つけた。

——え、なに、どういうこと？

理解が追いつかずに呆然とする美紀を、彼女はそのままにして部屋から出て行った。

彼女が去った後、美紀はしばらくぼうっとしていたが、疲れていたのか、いつの間にか寝てしまった。

そして次に目がさめた時、美紀は状況を確認するべく、勇気を出して部屋から出た。

「……なによ、このジャングル」

外はキャンプ場ではなかった。山というよりも密林を切り開いた土地に、簡素な小屋のような家がポツポツと立っているだけの集落といった感じだ。

住民は皆、布を身体に巻き付ける格好をしており、昨日の女性と同じく背が高い。日本人女性としては高身長である美紀が、まるで子供サイズだ。それに、皆が皆、虎の耳と尻尾をつけている。

そして住人に交じって、大きな虎が我が物顔で歩いていた。それも一匹ではなく複数だ。もしかして人よりも虎の方が多いかもしれない。

——どうということよ、誰か教えてよ。

外を見てさらにショックを受けた美紀は、元の部屋に戻る。本当に戻ってもいい場所なのか分からないが、今のところ居場所がそこしかないのだ。

中に戻る際、家のドアが全部カウンター扉のように開け閉め自由な造りになっていることに気付く。もしかして、虎の出入りのためだろうか。

改めて、ここは自分の知る場所ではないのだと思い知らされる。

「……私、一体どこにいるんだろう」

美紀は深いため息を吐いた。

それから二日くらい、美紀は虎がうろつく外が怖くて、部屋に閉じこもりつきりだった。その間、食事を持って来てくれたのは、最初に見たあの女性だ。

元々着ていた服は駄目になったわけではなく、洗濯して綺麗な状態で返してくれた。しかし、それ一着しか服がないので、着替えとして大きな布を貰い、集落の女性に倣^{なま}って胸の上で巻いて留める。

美紀は現在の状況が分からなくとも、彼女に保護されているらしいということは理解できた。

「あの、ありがとうございます」

気持ちだけでも伝わればと思い礼を言うと、彼女はニコリと笑う。

「※※、アルザ※※」

なにを喋^{しゃべ}っているのかさっぱり分からないが、彼女自身を指しながら言っている単語だけは聞き取れた。彼女はアルザというらしい。

「あの、私は加納美紀、美紀です！」

美紀という名前を繰り返すと、アルザは「ミキ、ミキ」と何度か言い直していた。どうやら呼びにくいらしい。

美紀はその後も数日閉じこもっていたのだが、様子をうかがっているうちに、虎が住人を襲わないうことを理解した。住人は虎と家族のように親しげに接している。ただ、それが分かったとしても、美紀にとって虎は大きくて怖いのだが。

——でもいいかげん、外に出るべきよね。

保護してもらっている身で、閉じこもってばかりでは迷惑だろう。そう思いつつも、どこなのかも分からない外に出るのは勇気がいる。

「……はあ」

口から自然と深いため息が漏れる。言葉が分からない上に、外には虎がたくさんいる場所で、美紀は心細くなっていた。

——父さんや母さん、どうしてるかな？

ふいにそんな思いが浮かぶ。

マッサージ師になることを反対されたのをきっかけに疎遠になっていた両親とは、会社に就職してから連絡を取っていない。キャンプに行くという話も、当然していない。けれど、もうそろそろ行方不明になった美紀のことが伝わっているだろう。

心配しているに違いない両親を思い、美紀はほろ苦い気持ちになる。

「……私って親不孝だな」

自慢の娘になれず、喧嘩別れをしたまま、こうして異郷の地に来てしまっ^て心配をかけている。疎遠になっていた両親だが、やはり忘れることなんてできないのだと、しみじみ思った。

ホームシックに陥^{おぼ}つた美紀はベッドに横になり、グズグズと涙を零^{こぼ}す。すると今までの悲しかった場面が次々と思い浮かんでしまい、やがて大きな声を上げて子供みたいに泣いたのだった。

そして翌朝。

「……顔が痛い」

美紀は腫^はれぼったい顔で起きた。だがそれとは裏腹に、心は晴れ晴れとしている。失恋であれだけ泣いたというのに、まだ泣き足りなかったらしい。

——いや、今までは悲しくて泣いてたんじゃなかったのかも。

失恋の涙はどちらかというと略奪愛への悔し涙で、悲しいというより、怒りの気持ちが強かった。怒ることで前を向けるといふ人もいるかもしれないが、美紀の場合は怒っても後に残るのは虚^{むな}しさだけ。だから、泣いても泣いても苦しみばかりが募^たっていった。

けれど昨日の涙はただひたすらに悲しい気持ちで流したものだ。悲劇のヒロイン気分で、あれもこれも悲しかったとワンワン泣いた。涙と一緒にその気持ちも流れていったから、泣いてすっきりしたのだろう。

気分が変わった美紀は、部屋に閉じこもるのをやめた。いつまでもこうしてはいられないと、やっと踏ん切りがついたのだ。

「よし、ちゃんと外に出よう」

外に出て改めて集落を観察すると、密林を切り開いているというよりも、偶然開^{ひら}けていた場所を

上手く使って集落を作ったという方が正しいようだ。生えている木をそのまま残して家を建ててあるので、人工的な雰囲気ほとんどない。

あえて言うならば川から水路を引いている点だが、それも近くに木を移植させることで上手く自然に溶け込ませている。

集落のあちらこちらに大きな池があり、そこで虎達が水浴びしていた。この気候はじつとしていても汗をかくくらいだから、水浴びはさぞ気持ちいいだろう。

そんなことを考えながらぼうっと見ていると、美紀を珍しがった虎があちらこちらから寄って来る。

「いや、来なくていいから！ 水浴びしていいから！」

手を振りまわしながら後ずさるも、虎の集団に囲まれてしまう。

「グルル」

「グル？」

「ギャーウ」

虎達がまるで会話するかのようには鳴き合う。『ちよつと味見してみるか？』とか話し合っていたらどうしようと、美紀は顔が青くなる。

「※※※！」

その時、離れた場所から誰かが声をかけた。すると虎達はパッと散っていく。

——ああ、ドキドキした！

虎から解放された美紀は、アルザを探す。彼女は集落の真ん中にある調理場で、他の住人達と一緒に食事を作っていた。

「おはようございます！」

そう挨拶をすると、アルザは腫れて酷い顔をしている美紀に一瞬驚いた顔をしたものの、すぐに笑って挨拶らしき言葉を返してきた。

「あの、なにか手伝います！」

美紀は言葉が通じないなら行動で示そうと、横に積んであった汚れた鍋や皿を持つ。

「洗ってきますね！」

そう言っ指さした先には、水路で洗い物をしている住人達の姿がある。きつとあそこで洗えばいいのだろう。

「※※※※！」

アルザがニコリと笑って手を振ったので、『よろしくね』とでも言われたのかもしれない。美紀もそれに笑顔を返して、水路に沿って座る住人達に交じる。

水路で洗い物なんて原始的な行為だが、日本でかつて一昔前まで似たような状態だったと聞く。

そう思えば少しだけ引けていた腰も据わるというものだ。

洗剤もないので水だけで洗うのかと思って周りを見ていたら、隣に座る女性から掌サイズの葉っぱを渡された。そして彼女がするようにそれで皿をなぞると、ヌルヌルとした液体が付着して、汚れが綺麗に落ちる。

「すごい、洗剤の葉っぱなのね！」

葉っぱ一枚に感心する美紀に、周囲の者達が笑い声を上げる。そして、水路沿いに植えてある木を指さした。どうやらあの木の葉っぱらしい。洗剤の葉っぱを水路に沿って植えてあるとは、なかなか合理的に考えられている。

洗い物を終えて戻ると、丁度朝食が出来上がっていた。

メニューは硬くて薄い円盤状のパンらしきものと、肉と豆の煮込み料理。肉はなんと蛇肉だ。美紀は今まで出来上がった料理しか見ていなかったせいで、ずっと鶏肉だと思っっていた。材料を見た瞬間はギョツとしてしまったが、もう食べているものだから気にしないことにする。

ここは家畜などはいないよう、乳製品や卵も見ない。確かにこれだけ虎を放してれば、家畜も怖がって逃げ出すだろう。

ちなみに酒やお茶はあった。これらの嗜好品があるということは、あえて素朴な生活をしているだけで、住人達の文化水準はそれなりなのかもしれない。

美紀は今まで食事を部屋で食べていたが、今日はアルザや他の住人と一緒に外で食べることにした。皆思い思いに地面に座り、木の器に好きなだけ料理を盛っていく。

美紀も料理を盛ったら、隣の女性にしかめ面^{つら}で追加された。量が少ないと思われたのだろうが、住人とは体格の違う美紀では、同じ量を食べられない。

食事をしながら見渡せば、他の場所でも所々に集まって食事しているのが見える。たぶんこれが普通の食事風景で、天気が悪い時にだけ屋内で食べるのかもしれない。

——風が気持ちいい。もつと早く出てみればよかった。
こんな大勢で食事をするのは、いつぶりだろうか。周囲の会話は分からなかったが、美紀はこの雰囲気を楽しんでいた。

食事が終わると、食べ終えた皿と一緒に、借り物の着替えも洗濯することにした。洗濯は食事の油污れを避けるため、別の水路でするようだが、洗剤は同じ葉っぱだ。

その後も美紀はアルザと身振り手振りで交流を図り、ちよつとした家事手伝いをした。

そうして外を歩いていると、虎の子が周りをウロウロしているのが見えた。

——可愛いなあ……

動物の子供というのは、どうしてこうも愛らしいのか。抱き上げてお腹の毛を撫でたり肉球を触つてみたい気がするが、いかんせんその周りにいる大人の虎が怖い。あの虎達に慣れる時は、果たして来るのだろうか？

それから数日が経った。

美紀はアルザ達の手伝いをしていうちに、次第に住民達と打ち解けてきた。

なにせアルザを始めとした皆が、言葉の通じない美紀を子供のように扱うのだ。

美紀も子供扱いに甘えて、なにをするにも皆を頼る。これが美紀に大きな安心感を与えていた。

——思えばこんなに誰かに甘えるなんて、いつぶりかな……

美紀は子供の頃から、周囲の面倒を率先して見る立場に置かれていた。美紀の世話を焼いてくれ

る人はおらず、両親にすらも『自分でできるだろう』と放置された記憶しかない。

失恋して、キャンプで鉄砲水てつぽうずにあつて、言葉の通じない土地に流されて——踏んだり蹴ったりな状況だが、この安心感を得られた点はいいことのような気がする。

「もつと早く、こうして飛び出せばよかったのかも……」

誰も自分を知らない土地へ行けば、こんな解放感が待っていたのだろうか。けれど美紀には、そんな冒険をする勇気がなかった。今は成り行きでここにいるが、自発的な行動で同じ状況に到達できるかは、甚だ怪しい。

こうしてのびのびと暮らす一方で、やはり原始的な生活は苦勞もたくさんある。火をつけるのは火打石で、水は川から汲む、そして食糧を得るのは基本狩りだ。

便利な電化製品に囲まれて生きて来た美紀にとっては、蛇口から水が出て、スイッチ一つで火がつく生活が恋しい。スーパ―やコンビニでお菓子や総菜を買いたいとも思う。

——文明的な生活がしたい、なにより水浴びじゃなくてお風呂に入りたい！

そう、この集落には風呂がないのである。風呂好きの身には、辛い環境だ。

とはいえ、文明的に劣っているから風呂がない、というわけではないようだ。むしろここでの暮らしの至るところで、文明を感じさせるものを見る。酒やお茶以外で言うくと、女性が精巧な装飾品を身につけているのだ。もしかすると近くに、それなりに栄えた街があるのかもしれない。その街へ行けば、日本への帰り方が分かるだろうか？

美紀はそんな希望を抱くものの、現実には言葉が通じず、ここがどこなのかすら分からない。集落

から一步外に出ればジャングルの中で、安易に飛び出す気にもなれなかった。

大体、あのキャンプ場近くの川で流されて、どうやったらかんなジャングルに流れ着くというのか。住人が虎の耳と尻尾の飾りをつけている理由だって、宗教的なものだろうと思いつつも、本当のところは分からない。

美紀にとっては謎ばかりのまま、気が付けば半月が経っていた。

ある日、朝食を終えて川辺でのんびりしていると、どこからか騒ぎ声が聞こえてきた。

「※※※※！」

「※※※※？」

何事かと美紀が様子を窺っている、集落の入り口に人も虎も集まっているのが見えた。

——なにかあったのかしら？

美紀も集まりに近寄って見たものの、背が高い住人達はさながら巨人の壁だ。それでもなんとか前を覗き見ようと隙間を探していると、美紀に気付いた隣の人から何故か集団の前に連れて行かれる。

——え、なにになに？

突然前に出されて慌てる美紀の目の前に、二人の人物が立った。

短い白髪に褐色の肌をした長身の男性と、薄茶色のショートボブヘアに白い肌の小柄な女性だ。

男性は三十歳前後、女性は美紀と同じくらいの年齢に見える。二人はこの集落の住人とは違い、洋

服を身につけていた。どうやら集落の外から来た人間のようなのだ。

さらに気になるのは、男性には白くて丸い耳と、白に黒の縞模様しまの細長い尻尾がついており、女性にはピンと立つ細長くてモフモフした薄茶色の耳がついていることである。

——男の人は白い虎、女の人は兎？

ケモ耳と尻尾をつけるのは、この集落独特の文化ではないらしい。

二人の方も、美紀を観察している。

「※※※※？」

「※※※※」

二人で何事か話し合った後、兎の女性がトコトコとこちらに近付いてくる。

「え、え、なんですか？」

思わず後ずさった美紀に対して、兎の女性は気にせず距離を詰めて来る。

「※※※※」

そして小さく咬くはいた後、美紀の額ひたいに手を触れる。

途端に、身体を熱いなかを通り抜けた。

すると、次の瞬間——

「私の言っていること、分かるかな？」

「……っ分かります！」

突然美紀の耳に、兎の女性の声で日本語が聞こえてきた。



「おお、言葉が分かるぞ！」

「本当だ」

「よかったよかった！」

さらに不思議なことに、住人の声も日本語で聞こえる。

「皆さん、日本語が喋れるんですか!？」

だとしたら、今まで会話が通じないのはなんだったのか。驚く美紀に、兎の女性が首を傾げた。

「ニホンゴ、っていうのがアナタの国の言語なのかぁ。私は呪術師のハンナ。呪術で言葉を繋いだだけだよ」

ハンナが間延びした言い方で説明する。

——ジュジュツシ、ってなによ？

それはもしや、呪術師のことだろうか。そして呪術でお互いの言葉が分かるようにしたと。そんなの、まるでおとぎ話みたいだ。

「ハンナ、言葉は通じているのか？」

美紀が混乱しているところに、白虎の男性が割って入った。

「ジョルト、もういいよ」

それにハンナがホワンと頷く。

「少し事情を聞きたいのだが。俺はこの里の者からの依頼で、言の葉の術を使う呪術師を連れて来た。アンタ一人か？ こんな秘境にどこから来たんだ？」

「ど、どこからって……」

白虎の男性——ジョルトに尋ねられたものの、美紀は答えることができない。

ジョルトはここが秘境だと告げた。そんな場所に、日本の川から流されてたどり着くなんてあり得ない。

謎だというところで止まっていた思考が、言葉が通じた途端に動き出す。

——私は今、どこにいるの？

この疑問の答えを導き出すのが恐ろしくなり、美紀の身体が知らずに震える。すると、ジロジロと美紀を眺めていたジョルトが口を開いた。

「どこの種族か分からないという話だったが、本当に分からないな」

「だねえ、耳も尻尾もないとか、不思議だね」

ジョルトとハンナの会話に、美紀の口から混乱と緊張で短い吐息が漏れる。種族とか、今までの人生で尋ねられたことのない質問だ。

「強いて言うなら人間じゃないですかね？」

この発言は、美紀としては自身の気持ちを和らげるために口にした、当たり前前の事実だったのだが——

ザワツ！

何故か周囲がどよめいた。

「人間!？」

「人間だって？」

「うそ、本当にいたんだ」

「初めて見たよ」

「ガルルル！」

集落の住人どころか、虎まで驚いている。

——な、なんでこんな反応なの？

戸惑う美紀に、ジョルトが難しい顔をした。

「人間だと？ 東の果ての人間保護区で暮らしているという噂を聞いたことはあるが、俺も本物は初めて見た。アクシデントかなにかで、保護区から出てしまったのか？」

「えー、人間って絶滅危惧種でしょう？ そんなヌルい管理なの？」

「現実にはここにいないんだから、それしか考えられないだろうが」

ジョルトとハンナの会話に、美紀は衝撃を受ける。

——人間保護区ってなに？ 絶滅危惧種、人間が？

意味は分かるが理解ができない言葉の羅列に、美紀は頭が真っ白になる。

「あの……皆さんも、人間ですよね？」

恐々と尋ねる美紀に、ジョルトが鋭い目を向けた。

「なにを言っている、見れば分かるだろう。俺達は獣人だ。俺やこの住人は虎の獣人、ハンナは兎の獣人だな」

——ジュウジン、つてもしかして獣人のこと？

呪術師に続いて、なんと非現実的な言葉だろうか。

説明に首を傾げる美紀を見て、ジョルトが「まるで幼子だな」と眉をひそめる。すると、ハンナがニパツと笑って耳を動かす。

「おっきな耳は兎人の証！」

美紀は住人の尻尾が揺れ動くところを見るたびに、あれらは機械仕掛けで動いているのだと言い聞かせてきた。しかし、ハンナの耳の動きは、自由自在で滑らか過ぎる。

——もしかしてあれって、飾りじゃなくて本物!?

今まで考えないようにしてきた事実が、美紀に襲い掛かる。

日本で、いや世界でも獣の耳と尻尾が生えた人間なんて聞いたことがない。

——ここって、地球じゃないの……!?

その結論にたどり着いた途端、酷いめまいを覚える。

「……おい!？」

焦ったようなジョルトの声を聞きながら、美紀は意識を失った。

ジョルトが街で知り合いの虎人の男性から話を聞いたのは、今から三日前のことだった。

相手の虎人は密林の奥の秘境地帯にある集落——虎人の里ハビルに住んでいる。そこは『人の姿ではなく獣の姿で過ごすことが自然である』という祖先の教えのもと、原始的な暮らしをしている里だ。その虎人達は他の虎人と少し違った生態をしているため、原虎人とも呼ばれている。

傭兵を生業にしているジョルトは、古い文化と遺跡が残っているその里に、時折学者を案内していた。

その際に顔見知りになった彼がわざわざ訪ねて来たので、酒場に誘ったのだが、すぐにジョルトは失敗したと思った。色鮮やかな布を腰に巻きつけただけの彼の服装を、他の客が興味津々で窺っているのだ。

しかし、彼はそんなことを気にする風ではない。運ばれて来る珍しい料理に目を輝かせ、ガツガツと食べている。

そして満足するまで食べると、街に来た理由を話し始めた。

「変な遭難者だど？」

「そうそう。尻尾もないし耳も見たことのない形だし、若い娘さんんだけど、どの種族なのかさっぱり分からないんだ」

彼が言うには、里の女性が魚をとりを上流の川岸に出かけたなら、そこに娘が倒れていたのだそうだ。匂いを嗅いでも種族は分からなかったが、水中を好む種族には見えなかったので、彼女は意識のない娘を里へ連れ帰った。

しばらくして娘は意識を取り戻したものの言葉が通じず、虎の姿に怯えてばかりなのだという。

「共通語が喋れないのか」

「そう、だから困っちゃってさあ」

ジョルトの指摘に、彼が肩を竦める。

獣人は種族ごとに扱う言語が違う。だが多種族が暮らす街では不便なので、ある時共通語が生み出された。今では田舎でも話せる者が一人はいるし、旅をする者なら当然話せる。

それなのに、共通語を話せない遭難者とはおかしなことだ。

「何族か分からないけど弱い種族みたいだから、外の街に連れて行ってあげた方がいいんじゃないかと思うんだ。けどさあ、俺達だって外のことには詳しくないし。第一、言葉が通じないから事情も聞けなくて困ってるんだよ」

そして虎人の里の住人で話し合った結果、外の頼りになる人に助けを求めようということになり、彼がこうしてやって来たらしい。

「だからさあ、なにか知恵を貸してくれ」

「まあ、それは構わんが。まずは話ができないことにはなあ」

「ねえ、なんのハナシ〜？」

相談されたジョルトも困っていると、背後から声がかけられる。振り向くと、ハンナが立っていた。

「ハンナ、てめえこの街にいたのか」

「そーう！ さつき着いてここでご飯してたよ。ねえねえ、なんの悪だくみしてるの〜？」

ハンナは面白いことを見つけたような顔をしてジョルトの隣に座ると、テーブルに残っている料理を勝手に食べ始める。

「あ、こら！ 俺の肉！」

「いーじゃんかケチ。で、なんの話？」

ハンナはどうあっても話に参加したらしい。

——どうするかなあ……

ハンナは腕のいい呪術師で、ジョルトは何度か一緒に仕事をしたことがあった。本来ならどこかの国で専属の呪術師として雇われていてもおかしくない実力なのだが、何故か各地をフラフラ旅している変わり者だ。彼女は、他種族同士の意思疎通に使う『言の葉の呪術』を扱えるので、今回の問題にはうってつけの呪術師なのだが……

——コイツ、愉快犯の気があるからなあ。

「面白そう」の一言で、おさまるはずの騒ぎを引つ掻きまわされたことが何度もある。どういう状況か分からない場所に連れて行くには、不安のある相手なのだ。

だがジョルトの心配をよそに、ハンナは虎人の男性から詳しい話を聞いてしまった。

「噂の秘境の里！ 行ってみたい！」

耳をピンと立たせて、やる気を見せるハンナ。言い出したら聞かない相手でもあるので、こうなっては仕方ない。ジョルト達は三人で虎人の里に向かうことにする。

けれど、まさかそこで噂に伝え聞いた人間というものを目にするとは、思ってもいなかった。

美紀が意識を取り戻したのは、昼近くになってからだだった。いつの間に寝てしまったのかと疑問を抱くが、すぐに思い出す。

——そういえば、気を失ったんだ。

そのままベッドの上でぼんやりしていると、アルザがドアから顔を覗かせた。

「気が付いたのかい!? 大丈夫? 苦しいところはない?」

彼女はベッドの端に座ると、今までと同じ優しい手つきで背中を撫でてくれた。

「突然倒れるからびつくりしたよ。全く、よく倒れる娘だね」

本気で心配している様子に、美紀は申し訳なくも有り難い気持ちになる。言葉が通じると、今までのアルザの優しさがいつそう身に染みる気がした。

「もう平気です、ご心配をおかけしました」

美紀が謝ると、アルザはぎゅっと抱きしめてくる。

「そんなこと、気にしなくていいんだよ。この密林に迷い込んだ者を見つけたら助ける——この里の住人には当たり前のことさ」

見ず知らずの、言葉も通じない面倒な自分をそんな心意気で助けてくれたのか。異世界で受けた人情に、美紀の目元がジワリと潤うるんだ。

「じゃあミキ、改めて、ようこそ虎人の里ハビルへ！」

ニコツと笑ったアルザが握手を求めてきた。

しっかりと握手を交わした後、彼女に勧められたお茶を飲んで、気分が落ち着いたところで話を切り出される。

「目が覚めたら教えてくれたってジヨルトに言われているんだけどね、アンタはどうだい? 話ができそうかい?」

ジヨルトの名前を聞いた美紀は、『人間は絶滅危惧種』という話まで思い出し、身体を震わせる。まだその言葉を受け入れられなかった。

「無理そうなら、そう言いなよ?」

心配してくれるアルザに、美紀は首を横に振った。

「いえ、ジヨルトさんと話をします」

「分かった。ちょっと待ってな」

アルザが呼びに行くと、すぐにジヨルトがやって来た。

「具合はどうだ?」

部屋に入るなりそう切り出したジヨルトに、美紀はなんとか微笑む。

「大丈夫です。いきなり気を失ってビックリさせて、すみません」

美紀は、アルザが置いていってくれたお茶を一口飲む。なにを言われるのかと緊張して、喉が渇いたのだ。

ジョルトは壁に寄りかかりながら無言でその様子を見つめていたが、やがてふっと息を吐く。「まずは自己紹介だな。俺はジョルト、傭兵だ。街に住んでいるが、たまに仕事でこの里に学者を案内する仕事を請け負うことから、この連中と面識がある。今回はその縁でアンタの事を相談された」

「どうやら美紀のためにわざわざやって来てくれたらしい。それに、やはり近くに街があるのだ。——どのくらいか街なのかしら？」

「いや、たとえド田舎の農村でも、この密林の狩り暮らしよりは文明的だろう。緊張していた気持ちの中に、興味が芽生えた。」

「里の者から、アンタは弱いし狩りもできないと聞いている。そんな奴がどうやってここにたどり着いたのか知らんが、よく生きていられたな」

ジョルトの言う通り、この集落の遅い住人達に比べれば、美紀は赤ん坊もいいところだろう。自分が今元気でいられるのは、全てアルザを始めとした皆の優しさのおかげだ。これが弱肉強食の社会だったら、とつづくに飢え死にしているに違いない。

「全部、皆さんの親切のおかげです」

美紀は神妙な表情で告げる。

「……性根は悪くなさそうだな。ところで、アンタの名前は？」

美紀は尋ねられて、名乗っていないかったことに今更気付く。

「あ、私は加納美紀、美紀という名前です。あの、私も聞きたいんですが、その、耳と尻尾は本

物？」

名乗るついでと勢いで、美紀は今まで最も気になっていた事を尋ねる。

——だって気になるんだもの！

先ほどからずっと、ジョルトの背後で白と黒の尻尾がユラユラと揺れているのだ。怖そうな見た目にして尻尾は可愛らしい。

視線が釘付けになっている美紀を見て、ジョルトは大きくため息をついた。

「当たり前過ぎることを聞くとは、人間というのはどういう教育をされているんだか」

そう言いつつも、彼は言葉を続ける。

「耳も尾も獣人の証で、獣の姿を象徴する部位だ。俺の場合は白虎だな」

ジョルトの説明に、美紀はなるほどと納得した。

気を失っている間に頭の中の整理が完了したのか、今は話がすんなり入ってくる。

これまでおかしいと思いつつも気付かないフリをしてきたが、もう認めてしまおう。

ここは地球ではない違う世界——いわゆる異世界なのだ。

「耳と尾の常識を知らないで、よく旅ができたな。アンタはどうやってここまで来たんだ？」

「……ええと」

美紀はどう答えたものかと一瞬迷ったものの、全て正直に言うことにした。上手な嘘をつける気がしなかったのだ。

「あの、私たぶん、この世界の人間ではないです」

「……は？」

美紀の告げた事実には、ジョルトが間拔けな声を出す。

——まあ、そういう反応になるわよね。

美紀だって日本で『実は私は異世界人だ』と言われたら、病院へ行くことを勧めるだろう。

そう思いつつも美紀は、とりあえずここへたどり着くまでの事を一方的に語り始めた。

「さっきあなたは人間が絶滅危惧種だと言いましたが、私が暮らしていた場所は人間だけが大量暮らす世界でした」

そこでキャンプ中に雨で増水した川に流されてしまったこと、気が付いたらこの集落で保護されていたこと。

これらの話を聞き終えたジョルトは、呆れ顔をしていた。

「アンタ、なんて恐れ知らずなんだ。雨の後の川が危険だなんて、子供でも知っていることだぞ」

「いや、まあ、あの時の私はどうかしていたんだと……」

正論を吐かれ、美紀は小さくなるしかない。

あの時は本当に、自分以外の周りが見えていなかったのだ。

「それで、流されて気が付いたらこのあたりにいたというのか？」

「そうです」

美紀が頷くと、ジョルトは「ふーん……」と考えるように顎を撫でる。

「正直、違う世界というのは上手く呑み込めないが、人間が一人でここまで旅をしてきたという話

より、今の話の方が現実的に思えるな」

ジョルトに話の真偽を疑われるどころか現実的と言われてしまい、むしろ美紀の方が驚いた。

——この世界の人間って、どんな存在なの？

人間だと口にしただけで住人にざわつかれたのだ。希少な存在なのはうつつすらと分かるが、それがどの程度のものなのか。

「あの、人間ってそんなに珍しいんですか？」

美紀の疑問に、ジョルトが考え込みながら口を開く。

「昔は世界中に獣人と同じ数だけいたようだが、今は東の果ての人間保護区にしかないらしい。二百人もいないと聞いたことがある」

「そんなに少ないんですか!？」

「そうだ、俺の白虎族も結構な希少種だが、人間よりはずっと多いさ。だから、希少な人間の種を絶やさないために、許可なしでは保護区に立ち入れないそうだ。俺も人間を見たことがあるという奴を知らないな」

ジョルトがそう言っ肩を竦める。

確かに二百人もいないのなら、他の種族の血を入れると純粋な人間はすぐに絶えてしまうかもしれない。子に引き継がれる遺伝子が獣人の方が強かったとしたら、余計に。

——もしかして、それが理由で人間の数が減ったのかも？

この思い付きは、案外当たっているのかもしれない。

「そんなわけだから、もしアンタが保護区に行きたいと言っても、すんなり事が運ぶとは考えにくい。なにせ東にあるってだけで、詳しい場所は誰も知らないからな」

現状をはつきりと伝えるジョルトの態度は、妙に期待を抱かせるよりも好感が持てる。

ジョルトが教えてくれたことを考慮した結果、美紀が出した答えは『行かない』だった。

——そんな隔絶されたところに住んでいる人と、話が合う気がしないわね。

たとえ同じ人間でも、異世界で育った彼らとは馴染めないだろう。

「私はそんな大変な思いをしてまで、保護区に行きたいとは思えません」

「そうか」

美紀の答えに、ジョルトは目元を和らげてホッとしたような顔をする。『保護区に連れて行け』と言われた場合を考えていたのかもしれない。どこにあるのかも分からない場所に連れて行くなんて無茶ぶりにもほどがあるので、不安に思ったとしても無理はなかった。

「だが、これからどうするつもりだ。人間は人の姿しか持たないと聞けど、それだここは暮らしていくだろう」

ジョルトに今後の生活を心配された。

だが、同時に不思議なことを耳にし、美紀は気になってしまふ。

——人の姿しか持たない？

この言い方だと、ジョルトが人ではない姿を持っていると言っているようである。

思い出せば、ジョルトは自分達を獣人と呼んだ。『獣』と『人』で『獣人』だということは——

「もしかして、あなた達、獣の姿にもなれるの？」

美紀の推察に、ジョルトの方が驚いている。

「常識過ぎて、そこに疑問を持たれるとは思わなかった。確かに、俺は白虎の姿になれるし、ハナは兎の姿になれる。この里の連中は虎だな」

ということとは、アルザも虎の姿になれるのだ。最初にこの家の中で見た虎は、アルザだったのかもしれない。

——って、あれ？ 虎？

虎なら、いつも集落の中を我が物顔でうろついている。

「じゃあ、外にいるあの虎達も人なんですか!？」

よく美紀に近寄って来る虎の子は、ペットではなくこの集落に暮らす子供だったのか。

美紀の驚きように、ジョルトはおかしそうに喉を鳴らす。

「あいつら、アンタに怯えられたってしよげてたぞ。まあこの虎人は他の虎人と少し違って、身体がデカいからな。慣れないと怖く思うのも無理はないさ」

——確かに、虎にしてはちよつと大きすぎじゃない？ って思ってたけど……

大人の虎にじゃれつかれた時は恐怖を覚えていたのだが、あれはもしかしてちよつと肩を叩くつもりだったのだろうか。事情を知らないのと、パクツと食べられる一歩手前の行動にしか見えない。

「で、話を戻すが。アンタがその気なら、俺が街へ連れて行くぞ。街なら水道もあるし、ここよりは楽に過ごせるだろう」

「……本当に？」

予想外の申し出に、美紀は表情を明るくする。ここでの生活は嫌いではないが、暮らしやすいとお世辞にも言えない。やはり文明的な社会が恋しい。インフラが整備されていて、少なくともこの集落よりは文明的な生活が送れそうな場所——行けるものなら行きたいに決まっている。だが問題はあつた。

「あの、街までの日数はどのくらいかかりますか？」

恐る恐る美紀は尋ねる。この世界の文明がどの程度発達しているのか分からないが、移動に電車やバスは使えるのだろうか。もし移動手段が徒歩しかなく、長旅になった場合、美紀はついていけないかもしれない。

この質問に、ジョルトが少し考える様子を見せた。

「俺が住んでいるのはガルタ。大きな街の中ではここに一番近い。ハンナを連れて三日かかったから、アンタの場合は倍を見ておいた方がいいな」

倍ならば一週間程度ということか。ジョルトに唇^{くちびる}について確認すると、曜日などの呼び方が違うだけで、一週間や一カ月の間隔は大体同じらしい。

——覚悟していたほどではない、かな？

一週間とは長いようだが、一カ月と言われるよりはマシだろう。

男性、しかも出会ったばかりの相手との旅はさすがに怖い、ハンナも一緒なのだから少しはマシだ。これを逃したら、移動するチャンスはないかもしれない。

「行きたい、連れて行って欲しいです！」

街にはここよりもっとたくさんのお客の人がウロウロしている可能性があるという、若干の不安要素には目をつぶり、美紀は街の暮らしを楽しむことにした。

そして、その日の夜。

住人達が美紀に里での思い出を作ろうと、盛大な宴^{うたげ}を開いてくれた。人と獣、それぞれの姿で、全員集落の真ん中にある広場に集まる。

時間が経つにつれて酒が進み、住人達が陽気に歌って踊り出す。その様子を楽しく眺める美紀の隣に、アルザが座った。

「美紀は弱い種族なんだから、ちゃんと強い種族に守ってもらいなよ！」

そう言つてバンバンと肩を叩かれると、ちよつと痛い。たぶんアルザにとっては少し小突いていく程度なのだろうが。

美紀は笑顔で話を聞きながらも、今まで心配していたことを思い切つて聞いてみる。

「そういえば、私が寝ていた部屋って誰かの部屋だったんですか？ 私のせいで家族が追い出されたりとかしてませんか？」

アルザが時折外で親しそうにしている男性がいるので、ひよつとして彼女の夫を追い出してしまったのではないかと気にしていたのだ。

美紀はそう心配するが、アルザは首を傾げていた。

「あの部屋は独立して里の外にいる息子の部屋だし、アンタが住むことは旦那も了解済みだよ」
「え、やっぱり旦那様がいらしたんですね!」

やはり家族を追い出してしまったのかと顔を青くする美紀の肩を、いつの間にか背後にいたジョルトがポンと叩いた。

「たぶん話が通じていないぞ。この里は夫婦別居というしきたりがある。旦那が嫁の家に通うんだ」

「……あ、そうなんですか」

誰かを不幸にしたわけではないと分かり、美紀はホッとすする。

その後も住人達に色々と話しかけられ、美紀がそれらに笑顔で応じていると、いつも近くをウロウロしていた虎の子供もやって来た。

「ミヤウー」

こちらを見上げてコテンと首を傾げる子虎の愛くるしさに、美紀は恐る恐る手を伸ばし、ゆっくりと抱き上げる。

——うわぁ可愛い!

柔らかな毛並みと、まださほど固くない肉球の感触に、美紀は感激する。

「人の姿になれないの?」

きつと人の姿でも可愛いんだろうと思つて聞くと、ジョルトが笑つて教えてくれた。

「子供はある程度大きくなるまで、人の姿をとれない。コイツの場合だと、あと少しといったところか」

「なるほど……」

人になれないうちは赤ん坊と一緒にのかもしれない。

こうして新発見が色々あったが、逆に獣人達の注目をひいたのは美紀の耳だ。皆が入れ替わり立ち替わり隣にやって来ては、美紀の耳を軽くつまんで行く。

「人間の耳つてのは変な形だなあ」

「毛がないんだね、人間の耳は」

「ほわー」

「強いて言えば、猿族に似ているか?」

「猿族の耳はもつと大きいぞ」

初めて見る人間の耳に興味津々で、あちらこちらで議論をしている。耳は種族の証らしいから、他種族の耳を知ることが大事なのもかもしれない。

——いろんな種族がいるみたいだから、私も街に行ったら勉強しなきゃ。

密かに決心する美紀の隣に、今度はハンナがやって来た。

「兎族もあんまり街中で見ない種族だから、私の耳だつて珍しいんだよ」

酒を飲んでほんのりと頬を赤くしたハンナが、耳をペロンと垂らして美紀に近付ける。

「……フワフワ!」

ハンナの薄茶色の長い耳に頬を撫でられ、美紀がその感触に驚いていると、次はハンナが美紀の

耳に触れてきた。

「ふふん、これで私とミキはお友達♪」

「どうやら、耳を触り合うと友達になるらしい。」

「こらハンナ、今のは強引だったぞ」

美紀の背後で酒を飲んでいたジョルトが、ハンナを窘める。

「いいじゃん、仲良くなりたいたいんだもん」

それに対して、ハンナがふうつと頬を膨らませて抗議した。

「いいんです。私もフワフワの耳に触れて、ちょっと得しちゃいましたし」

「ほらほら〜!」

美紀が擁護すると、ハンナがジョルトに「んべつ」と舌を出す。

「二人は、仲がいいんですね」

そう言つて小さく笑う美紀に、ジョルトが嫌そうな顔をした。

「コイツは腕のいい呪術師だから、たまに仕事で組むことがあるだけだ。自由人だから一緒にいると苦労の方が多いぞ」

「いいんだもん、自由人で♪」

ハンナがぎゅつと抱き着いてきた。

この時、耳を触り合う行為についてもっと突っ込んで聞いておけば、後の事件は防げたかもしれないと、美紀は後悔する羽目になる。

ジョルトが虎人の里で保護されていた女性を初めて見た時、あまりの小ささに子供かと思つたが、身体からはすでに成熟している匂いがした。

——何族なのか、判断がしにくいな。

大抵の相手は種族を隠していたとしても、臭いや外見でどの系統の種族かおおよその見当が付く。だが彼女はそれが分からない。それでも探りながら会話をしていると、彼女は驚きの発言をした。

「強いて言うなら人間じゃないですかね？」

——人間だと？

人間という種族について、ジョルトもあまり多くは知らない。分かっているのは、この世界で最も絶滅の危機に瀕している種族で、とてもひ弱だということくらいか。

彼女はジョルト達に人間ではないのかと問うてきた。自分達は獣人だと言っても、いまひとつ分かっている顔をする。獣人について知らないなんて、いくら人間という特殊な種族だとしてもあり得るだろうか？

疑問がジョルトの頭の中を渦巻く。そうしているうちに、ふいに目の前の彼女が気を失つてしまった。

「……おい!？」

突然のことに驚くジョルトを、ハンナがジトリとした目で見た。

「ジョルトの顔が怖かったんじゃないの〜？」

「この顔は生まれつきなんだから、仕方ないだろう」

ジョルトは無然として言い返す。

その間に彼女はアルザという女性に、部屋に運ばれて行った。改めて話をしようと目を覚ますのを待つ間、アルザから話を聞いた。

「あの娘は一生懸命、里に馴染もうと頑張っていてねえ。でもここはこんな暮らしたしさ。できれば安全な街へ連れて行ってやって欲しいんだよ」

アルザは彼女をずいぶん可愛がっている様子だった。

この里は、同じ虎人族から見てもとても不便な生活様式である。その中であんなに体格の小さな弱い種族が生活するのは、簡単ではないだろう。

突然現れた彼女だが、里の中で彼女の事を悪く言う者はいなかった。

「このままここで暮らせばいいと思うがよお」

「アルザの後ろをチョコチョコついて回って手伝いして、健気でねえ」

「いい娘だよ」

「でも、いつうっかり怪我しないかとヒヤヒヤしてなあ」

「だからいつまでもここにいるのは良くないと思うのさ」

アルザがしんみりと言っていた。

しばらくして、彼女が目を覚ましたと聞き会いに行く。

彼女に名を聞くと、ミキと答えた。

ミキは話をすれば理性的だが物知らずで、やはり獣人のことを知らないという。

だがさらに驚くべきは、ミキがこの世界の人間ではないと発言したことだ。そんなことがあり得るのかも思うが、人間が一人でここまで旅をしてこられるはずがないことを考えれば、むしろミキの話の方が説得力がある。

それにミキの様子からは都会で暮らしていたであろうことが窺える。少なくとも二百人程度が身を寄せ合って暮らしているような、小さな集落にいたのではなさそうだ。街の話を聞いてミキは目を輝かせたが、あれはまだ見ぬ場所を夢見るものではない。すでに知っている場所を望む目だった。そして、ミキにとっては獣人という存在自体が珍しいらしい。里の者が獣体で歩く姿に怯えつつも、自然と目で追っている。獣体を持たない人間故か、魅力的に映るようだ。

その一方で、白虎という種族には反応を示さない。ジョルトは自分が希少種であることをさりげなく告げてみたが、ミキは特になにを言うわけでもなかった。これは珍しいことである。

獣人というのは、男女共に希少種である方がよりモテる。つまり、白虎族というだけで引く手あまたなのだ。これはモテたい者には幸運かもしれないが、そうでない者にとっては苦痛でしかない。ジョルト自身、傭兵としてあちらこちらを歩いたが、どこへ行っても視線が付きまとう。今いるガルタの街は、大きな都よりもマシだから住んでいるだけだった。

大抵の獣人の女性は、ジョルトの白虎族の証あかしを見てとると、目の色を変えて誘惑しにかかり、あ